The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐宋詩における「移動」の表現について ： 「宦遊」から「閑遊」へ
Author(s)	岑, 天翔
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

唐宋詩における「移動」の表現について
―「宦遊」から「閑遊」へ―

中国文学　研究生（博士後期課程進学予定）
岑　天翔

はじめに

「移動」とは、ある場所から他の場所へ移ることであり、人間の日常生活の重要な構成部分である。中国の詩には、文人の「移動」に関する表現が数多く見られ、大きく二つの類型に分けられる。一つは「宦遊」、即ち科挙受験や任官のため故郷を離れて都や任地に赴く移動である。もう一つは「閑遊」、即ち故郷の周辺でのんびりと、心身に何の束縛もない状態で移動することである。

唐・北宋詩には「宦遊」の表現が主であり、南宋に至ると「閑遊」という新たな「移動」の表現が生み出された。本発表では、唐・北宋詩の「宦遊」と南宋詩の「閑遊」を比較しながら、二つの表現について考察を行う。そして、「閑遊」が南宋詩に多く表現された要因について解釈してみたい。

1.　唐・北宋詩における「宦遊」の表現

唐・北宋の詩に、「宦遊」に関する表現は枚挙にいとまがない。まず唐代の名詩人である王昌齢と高適の詩を挙げよう。王昌齢「山行入涇州」（『全唐詩』巻一四一）には、

倦此山路長、　　此の山路の長きに倦みて、
停驂問賓御。　　驂を停めて賓御に問ふ。
……中略……
徙倚望長風、　　徙倚して長風を望み、
滔滔引帰慮。　　滔滔として帰慮を引く。

唐・高適「赴彭州山行之作」（『全唐詩』巻一四一）には、

路長愁作客、　　路長く客と作るを愁へ、
年老更思歸。　　年老いて更に帰るを思う。

とある。ここで注目すべき点は、「山路長」・「路長」などの言葉によって、山道の長いさまが描き出されることである。詩人は長い旅路に向かい、「山路の長きに倦む」や「路長く客と作るを愁ふ」と嘆いた。「倦」は旅にうんざりする・嫌になるという気持ち、「愁」は憂える・悩むという気持ちを指す。つまり、この二つの詩には、旅が辛いこととして表現され、詩人のさびしくて苦しい感情が伝わってくる。

「宦遊」の表現について、もうひとつ注目すべき点は、旅に伴う望郷の念である。先に挙げた詩に、詩人たちは「帰慮」・「思帰」などの言葉を用い、望郷の念を表している。おそらく彼らは長い旅路に向かい、自然に故郷から離れて異客となる事実に気づき、故郷と親族を思い浮かべるだろう。

北宋の詩にも、同様の「宦遊」が表現されている。端的な例として、北宋・張耒の「二

十二日立秋夜行泊林皇港二首」（『瀛奎律髓』巻二九）其の一を取り上げる。本詩には、

老大畏為客、　　老大　客と為るを畏れ、
風波難計程。　　風波　程を計り難し。
家人夜深語、　　家人　夜深く語るは、
應念客猶征。　　応(まさ)に客の猶ほ征くを念ふべし。

とある。「風波」という語から見ると、「宦遊」は危険を伴うことを示唆する。また、「客と為るを畏れる」の語に示されるように、危険な旅（あるいは計り知れない行く末）に対する恐れが表現されている。つまり、詩人にとって、「宦遊」は決して快適ではなく、不安を伴う存在である。最後の二句は、家族が自分を心配する様子を描いているように見えるが、自分自身の家族に対する思いも現れている。家族への思いは「思郷」の一部として存在しているので、先に挙げた唐詩と同じく、本詩には望郷の念も表現されていると言えるだろう。

2. 南宋詩における「閑遊」の表現

中国詩における文人の移動表現には「宦遊」のほかにもう一つの類型がある。すなわち「閑遊」である。

「閑遊」は唐・北宋の詩にすでに現れている。だが、詩の数は少なく、「宦遊」に付随する存在にとどまっている。例えば、北宋・蘇軾が海南島への流罪から帰る途中に作った「郁孤台」（『施註蘇詩』巻三九）其の二には「吾生如寄耳、嶺海亦閑遊（吾が生は寄するが如きのみ、嶺海も亦た閑遊なり）」とある。ここで、蘇軾は超然とした態度で左遷の旅を「閑遊」と見なしている。これは不遇を受けた彼の自己慰撫に過ぎず、おそらく本格的な「閑遊」とは言えないだろう。

ところが、南宋になると、「閑遊」の表現は大幅に増えてくる。南宋の「閑遊」は、蘇軾の「閑遊」とは異なり、故郷の周辺の地でのんびりと、心身に何の束縛もないままに移動する行為、すなわち本格的な「閑遊」である。その代表例として、陸游の例が挙げられる。陸游『剣南詩稿』には、「閑遊」と題する詩は二十四首に達する。詩題に「閑遊」を掲げてはいないが「閑遊」に関する表現がなされる詩は多く、枚挙にいとまがない。ここでは、陸游の詩の中で「山行」と題し、山中の閑遊を表現した作品を取りあげて考察を加えてみたい。

陸游が故郷山陰にて作った「山行」（『剣南詩稿』巻六三）には、

南出柴門即是山、　　南に柴門を出づれば即ち是れ山なり、
青鞋踏破白雲間。　　青鞋　踏破す　白雲の間。
旋償酒券何時足、　　旋(やうや)く酒券を償へば何れの時にか足らん、
罷諾僧碑尽日閑。　　僧碑を諾(うべな)ふを罷(や)むれば尽日閑なり。

とある。冒頭には、家から出かけると、山の姿を眺めることができると述べられる。そうであれば、山は陸游の家に近いと考えられる。つまり、詩に表現される「山行」は長途の旅行ではなく、故郷の周辺における日帰りの旅であることを窺わせる。もう一つ注目すべき点は、本詩に描かれる「閑」という状態である。第四句には、暫く僧に頼まれた碑を書くという約束を破り、一日中のんびりして遊ぶことができるということを述べた。

ここには、何の心身の束縛もなく自由自在で気楽な状態が表現されている。

また、ほかの「山行」(『剣南詩稿』巻八二) には、「閑人日日得閑行 (閑人　日日　閑行するを得)」と書かれている。ここでは、陸游は「閑人」と自称し、自分の移動を「閑行」として捉える。別の「山行」(『剣南詩稿』巻二七) にも「七十衰翁短鬢斑、藥瓢藤杖伴清閑 (七十の衰翁　短鬢斑なり、藥瓢　藤杖　清閑に伴ふ)」とあって、「清閑 (俗事を離れて清くものしずか)」の状態がうたわれている。これらの詩例において、詩人の移動は常に「閑」と結びつけられている。陸游詩に表現された移動は、「閑遊」と呼ぶにふさわしいと言える。

陸游の「閑遊」詩は、第一章に挙げた唐代の「宦遊」詩と同じく「山行」と題し、詩人の山中の移動を描いている。しかし、陸游詩の「閑遊」は、次の二つの点において唐代の「宦遊」と全く異なっている。一つ目は、故郷の周辺ののんびりとした移動であるために危険な旅路に対する恐れ・不安が見られず、代わって故郷の風物への親近感や郷里に身を置く安定感が表現されていること、二つ目は、「宦遊」のような辛さが消え、旅をしているとき心身に何の束縛もない快適な状態と、旅に伴う喜びが表現されていることである。

3. 唐宋詩における「移動」の変容の要因

なぜ南宋に至ると、「閑遊」という新たな「移動」の表現が生み出されたのだろうか。本発表では二つの要因を取り上げてみたい。

一つ目は官吏登用法・任官制度が文人生活に与えた影響である。前近代中国の文人は官僚でもあり、彼らの生活は官吏登用法・任官制度と密接な関連がある。唐代においては、郷里の推薦を受けず純粋な実力試験による官僚登用制度としての科挙制度が形成され、それは北宋以降にも受け継がれてゆく。[1]科挙制度の下にあって、唐・北宋の文人は郷里を遠く離れ、首都及び地方に赴いて試験を受ける必要がある。また、任官制度について言えば、唐・北宋には本籍地迴避という任官政策が行われ、士人は異郷において任官しなければならなかった。[2]以上により、士人と郷里の結びつきは自ずと稀薄なものとなる傾向があった。加えて、唐宋期の官僚の任期は極めて短い。『新唐書』選挙志に「凡居官必四考」とあるように、四年に一度は転職することが規定されていた。実際には、これよりも短く、孫樵「書褒城驛壁」(『全唐文』巻七九五) に「遠者三歳一更、近者一二歳再更」と述べるように、任期が長い場合は三年に一度、短い場合は一年もしくは二年に二度の転任を命じられた。

以上のような官吏登用法・任官制度は、自ずと詩の表現にも影響を与えた。例えば、晩唐の呉融「霊寳県西側津」(『全唐詩』巻六八四) には「千里宦遊成底事、毎年風景是他郷 (千里宦遊　底事をか成す、毎年の風景　是れ他郷なり)」とあるように、絶えず異なる任地を転々とし、毎年異郷に客となって身をよせることが詠われている。こうして、「宦遊」は唐・北宋の詩の重要なテーマになっていったのである。

ところが、南宋になると文人の多くは「祠官」として故郷へ帰って暮らすようになる。「祠官」とは道観の管理職、名目上の官職である。「祠官」となった文人は実質的な職

---

[1] 宮崎市定『科挙史』(『宮崎市定全集』十五巻、岩波書店、1993 年収)、頁 16-40 を参照。
[2] 浜口重国「所謂隋の郷官廃止に就いて」(『秦漢隋唐史の研究下巻』、東京大学出版会、1966 年収) を参照。

務がないだけでなく給料も高いので、余裕ある生活を送ることができた。[3]従って、彼らは故郷の周辺を「閑遊」する機会を多く得られた。例えば、陸游、楊万里、劉克荘は頻繁に故郷に帰り、長期に渉って田舎で暮らすようになる。彼らは「故郷密着型」の詩人と見なされる。[4]総じて、南宋の文人には故郷との結びつきが密接となる傾向が見られる。

二つ目の要因は、詩学認識上の変化である。まず、唐人の詩学認識が反映される資料を挙げたい。唐・孫光憲『北夢瑣言』巻七には、晩唐の鄭綮について、

> 或曰、相國近有新詩否。對曰、詩思在灞橋風雪中驢子上、此處何以得之。（ある人は言った。宰相（鄭綮）さま、最近新しい詩を作りましたか。鄭綮は言った。詩想は吹雪のなか灞橋を渡るロバの上にある。ここ（朝廷）に居て、どうして詩が得られるか、と。）

とある。吹雪の中、ロバに乗って灞橋（長安の東に位置し、唐人の送別の場所である）をわたるというイメージは、宦遊の旅を始めることと解してよかろう。鄭綮は、旅の中にあってこそ、「詩思」（霊感・インスピレーション）が湧くと言っているのだ。この資料には、詩人は特別な事件、特別な心境を題材として詩を作るという詩学認識が現れている。唐代には、この詩学認識のもと、「宦遊」は「詩思」が湧いてくる契機として捉えられ、詩に頻繁に詠み込まれるようになる。また、それに伴って、普通・身近な移動である「閑遊」はあまり注目されず、見逃されていったのであろう。

ところが、陸游など南宋の文人たちは、唐人と異なる詩学認識を持ち、特別ではない題材を盛んに詩の中で詠み込む。例えば、陸游の「山行二首」（『剣南詩稿』巻三三）其の一は、「眼邊處處皆新句（眼辺　処処　皆新句なり）」と述べるように、身近にある風景や事柄を詩の素材として捉えている。同じく陸游「舟中作」（『剣南詩稿』巻六六）にも「村村皆画本、處處有詩材（村村　皆画本、処処　詩材有り）」とある。ここでは、慣れ親しんだ周辺の風景の中にこそ作詩の材料が潜んでいて、詩人はそれを発見して表現すべきだという詩学認識が見て取れる。南宋期には、このような詩学認識の下にあって、普通の日常的な移動である「閑遊」が詩の題材として広く受け入れられていったのであろう。

おわりに

本発表では、唐・宋詩における「移動」の表現について考察を加え、「宦遊」から「閑遊」への変容のプロセスの一端を明らかにした。また、かかる変容がもたらされた要因として、官吏登用法・任官制度の影響と詩学認識の変化という二つの要因があることを指摘した。

中国史については、これまで「唐宋変革論」なる時代区分論が行われてきた。唐から宋へと至る過程で、中国の社会・文化は大きく転換したとする学説である。詩における「移動」の表現について見ると、唐から北宋に至る段階ではまだ大きな転換は見られないが、北宋から南宋に至る段階で大きな転換が見られる。これはいったいどのような意味を持つのか、またそれについて従来の「唐宋変革論」と照らし合わせながら考えるならば、どのようなことが言えるのか。こうした問題については今後の検討課題としたい。

---

[3] 梁天錫『宋代祠禄制度考実』（台湾学生書局、1978 年）を参照。
[4] 浅見洋二「劉克荘と故郷＝田園」（内山精也編『南宋江湖の詩人たち』、勉誠出版、2015 年収）を参照。